

燃やす

自然は子どもをはぐくむ

海 卓子

「たき火」

渡辺 智世（六才） 昭52

「煙がね、目に入ってるね、そうすると、涙が出てきた。

煙がくると、逃げたの。逃げて、逃げて、煙が追いかけてくる。

ひっぱたこうと思っても、ひっぱたけない。手でさわってみようと思っても、見えない。手のすき間から、逃げちゃうの。」

これは生れて初めて落葉を集め、たき火をした幼児が、自分の行く方へ行く方へと、煙が追いかけてくるのに驚いて、つぶやいた言葉です。日常茶飯事であったことな出来事でさえ、このコンクリートジャングルに住む子どもたちにとっては、眼を見張るような不思議な出来

事であり、自然を実感を通して理解する貴重な体験となるのです。しかし、都会に於て、何人がこのような恩恵に預っているのでしょうか。〈人間性をはぐくむ自然観察園をノ〉昭五四・六・二七アピール文より

私共が毎日たき火をするようになったのは、今から三〇年ばかり前です。当時、年中組の女児が、兄の小学校一年生と留守番をしていて、マッチの火が障子にもえ移りポヤ騒ぎを起しました。幸に大事には至りませんでした。が、この経験を生かして、泥んこ、水あそび、火あそびなどの「禁じられた遊び」が公然と出来る空間がほしいと思えました。旧白金御料地の一角をなす園庭は、中央に土塁が突出し、スタジイの大木が数本あり、春も秋も落葉に恵まれています。

三才児も登園時、たき火に近づき小枝を拾ってくべる。燃え上る火の子に、ゆれるかげろうに、五色の煙と炎との関係、等々、一人一人、子どもの関心も異なります。年長組になれば、一週間に亘って、落葉集め、選別、落ち葉干し、芋洗い、たき火係などに分れて、「や

き芋」のグループ作業が展開されます。

これは、たまたま落葉集めをした女兒の絵日記から抜記したものです。

『お芋洗いはつめたい』 柘植まり子（六才）昭46

「まり子はね、落葉集める係だったの。お芋洗う係、水が冷たそうにみえたから、代ってあげたいと思った。

風が、ポーポー、ピューピューきても、洗っていたから、「えらいなー」って、おもったの。もしも、私に係だったら、私も、皆と同じにやるよ。」

手を赤くして、北風の中で、芋洗いをしている友だちの姿に感動し、「代ってあげたい」と同情し、自分自身をも励ましている姿が、人の心を打ちます。

見るたき火から、するたき火へ。たき火を手がかりに働く真剣な活動は、子どもものを見る眼、他人に対する思いやり、困難に打克つ人柄を育てる貴重な土台となっていくのです。

大学のドクターコース（心理学）を出て、思うところ

があり、兵庫県の山村の僧坊で修業をしているF氏は、次のように語られました。夏休みになると所謂非行少年といわれる子どもたちが泊りに来ます。常任する一五人の自分たちと一緒に稲作、野菜作り、大根の出荷などを手伝います。F氏が「どこが非行少年なのだろう」と思われる程よく働きます。「自分たちは、別に彼等をよくしようなどとは考えてもいないのですがね」と、もらされます。

この自然な、特別な眼で見ない、さりげない生活、たんぼに、畑に、大人が本気で働く姿に、気分もほぐれ、すなおに従順に、よるこんで働く、ということではないでしょうか。「たき火」は一例ですが、大人も、子どもも働くこと、それ自身が、子どもにやすらぎと、発見と、やる気をもたらすのではないのでしょうか。教育とは、ことばで教えることではなく、自然なものとなつてふれあいの中で心と心が通い合うものではないでしょうか。殊に年令が低ければ低い程、ことばは空しいものになります。

（白金幼稚園）